



Windows 2000 Datacenter Server & Unisys Enterprise Server ES7000

Case Study 9

商品先物取引業界向けのASPアウトソーシングシステムを
ES7000とWindows 2000 Datacenter Serverで構築

株式会社トレードビジョン

業種 商品先物業界向けアウトソーシング事業
本社所在地 東京都工東区

金融ビッグバンによる本格的な自由競争により、資産運用機関の一翼を担う商品先物取引業界にも大きな変革の波が押し寄せている。そのなかで、今後も“勝ち組”として生き残るには、ITを積極的に活用したサービス提供や高度な情報システム開発が不可欠だ。しかし、そのためには開発費の増大や要員確保などが大きな負担となる場合も多い。それを解決する手段として、アウトソーシングや共同開発が注視されている。そうした状況を受け、商品先物取引業界向けの情報システムの開発・運用を一括して請け負うASP(アプリケーションサービスプロバイダー)のアウトソーシング事業を目的に設立されたのが、トレードビジョンである。

出資会社4社の支援を受けてシステムを構築
顧客のニーズに応えるサービスを提供

トレードビジョンは、日本ユニシス70%、日本ユニコム15%、マイクロソフト10%、三井物産5%の出資(資本金2億円)により設立され、2002年1月から本格的な営業活動を開始している。トレードビジョンに出資した4社は、それぞれが持つノウハウおよび特性を活用し、同社が顧客ニーズに応え、サービスの充実を図るための全面的な支援を行っている。日本ユニシスは、商品先物取引業界の基幹系システム構築で培ってきた経験とノウハウをグループ全体で投入する。日本ユニコムは、商品先物取引業界の大手取引員であり、トレードビジョンのファーストユーザーとして、総合的な業務ノウハ

ウおよび業界発展の指針を提供する。マイクロソフトは、日本ユニシスと新世代データセンターシステム分野で包括提携を結んでおり、システム構築から運営までトータルな技術支援を行う。三井物産は、営業面での支援およびEビジネスの経験とノウハウをベースにオルガナイザー機能を提供する。

アウトソーシングサービスを受ける加盟会社は、中長期的なITコストの削減、システムの安全性・障害対応の迅速性向上、顧客管理機能の強化による営業活動の効率化、IT要員の戦略システム分野への充当、強者連合の創造などのメリットを享受することができ、システム経費を2~5割程度削減することが可能になる。

同社取締役社長の武石博氏によると「2002年6月に稼働を開始した日本ユニコムをはじめ、7月31日現在4社と契約済みで、3年後には20社程度とし最終的には商品先物取引企業の40%のシェアを確保することを目標としている」という。

止まらない業務系システムを
オープンシステムで実現

トレードビジョンは設立されたばかりの会社であるため、当然、業務システムもゼロからの構築となった。同社取締役管理部長の鈴木克男氏「ASPアプリケーションは、日本ユニシスが開発し、トレードビジョンに貸与・運用する形になっている。そのプラットフォームとして、ES7000とWindows 2000 Datacenter Serverを採用した」と導入の経緯を語る。

従来、日本ユニシスでは汎用機をベースにしたシステムで商品先物取引業界をサポートしてきた。その理由は、先物取引業務が基幹系システムであるため安全性、堅牢性が必須であるからだ。しかし、トレードビジョンのシステムを構築するにあたっては、手数料の自由化に対応するために、システムコスト(導入コスト、運用コスト)の抑制が可能なオープン系のシステムで構築したいという強い要望があり「止まら

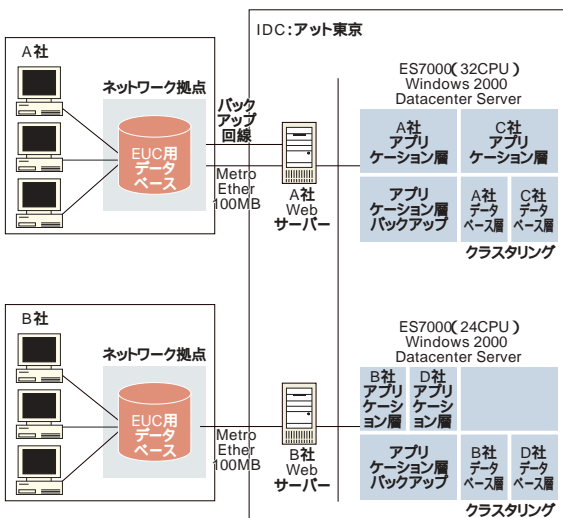


図1 ● ES 7000とWindows 2000 Datacenter Serverの組み合わせを2セット導入し、1台を32CPUの4パーティション、もう1台を24CPUの6パーティションで運用

ない業務系システムの構築を目的にすると、高速性、高可用性、安定性の面で汎用機に代わって利用できるオープン系プラットフォームとしてはES7000とWindows 2000 Datacenter Serverがほとんど唯一の製品となる。同時に日本ユニシスが商品先物取引業界において豊富な実績、経験、ノウハウを持っていることも評価した」(鈴木氏)。

ES7000を採用した理由として、CMPアーキテクチャの処理性能および信頼性、可用性はもちろんだが、特にES7000ではパーティショニング機能により、ASPサービスを提供する際に顧客別にパーティションを分割することで、ほかから影響を受けない独立した稼働環境を提供できる点が大きなアドバンテージとなった。1台のES7000に最大8パーティションを構築できること、顧客の規模によってCPU数を最適な数だけ割り当てられること、さらに顧客のサイジングに対してCPUの割り当て数を簡単に変更できる点がASPサービスに適していたという。

また、Windows 2000 Datacenter Serverを採用した理由としては、安全性が最大の理由であり、マイクロソフトから専用サポートプログラムが提供され、迅速な障害対応が保証されていたことが大きい。トレードビジョンのシステムは、Windows 2000 Datacenter ServerでASPアプリケーションを稼働させた初めての事例になるという。

アプリケーションは3階層システムで構成 オープン系の採用で他システムとも容易に連携

現在は、ES7000とWindows 2000 Datacenter Serverの組み合わせを2セット導入、1台を32CPUの4パーティション、もう1台を24CPUの6パーティションで運用している(図1)。32CPUの方が大手顧客向け、24CPUの方が中小の顧客向けとなる。

システムの中心となるアプリケーションは「COMTRADE」と名付けられ、日本ユニシスが開発したWindowsベースで初めての商品先物取引業界向けアプリケーションパッケージだ。これは、Web層、アプリケーション層、データベース層の3階層のシステム構成を基本設計に構築されており、中心となるアプリケーション層とデータベース層をES7000に搭載している。顧客ごとにパーティションを分け、それぞれにアプリケーション層とデータベース層を配置している。Web層は、これとは別にES2000とWindows 2000 Advanced Serverを顧客ごとに2セットずつ配置し、負荷分散を図っている。

COMTRADEでは、顧客管理機能を担う統合データベースを中心に、バックオフィス業務に必要な注文・約定機能、委託者の建玉管理機能、情報ベンダーから価格を取り込むための外部インタフェース機能、帳票作成機能、経理システム、収益管理システム、マーケティングシステムなどの他系

インタフェース機能などを備えている。基幹系がオープンシステムで組まれることにより、帳票作成機能、経理システム、収益管理システム、マーケティングシステムなどとの親和性が高く、容易に連携ができる点が特徴だ。

システムはすべてクラスタ構成により障害発生時にもノンストップで稼働するようになっている。ディスクもSAN (Storage Area Network)をミラー構成にして、すべてが2重化されている。

実際にES7000を置いている場所は、東京電力のデータセンター「アット東京」に日本ユニシスのデータセンターがあり、その一部を借りて設置している。そこには専任のスタッフが6名配置されている。データセンターと各加盟社のネットワーク拠点とは100Mbpsの専用線で接続されている。

業務の独自性および運用の独立性を確保して 他ベンダーとの差別化を図り

このシステムを導入した効果として「業務の独自性および運用の独立性が確保できることにより、ほかのアウトソーシングベンダーとサービスの差別化を図ることができ、競争力のあるシステム構築が可能になった。一方、日本ユニシスおよびマイクロソフトに対しては、安定したシステムの構築および質の高いサポートを期待する」と鈴木氏は語る。

今後の展開としては、「2002年11月からは24時間365日のサポートを行う予定。また、2002年11月から為替証拠金システムをはじめ、証券システムなどのサービスを段階的に稼働する計画であり、ホームトレードシステムのサービスも今後提供していく。将来的には、商品先物取引だけでなく、金融系のアウトソーシング事業まで取り扱うことが目標」と武石氏は語っている。なお、現在ES7000が2セット導入されているが、顧客の増加に合わせて「さらに今年度はES7000とWindows 2000 Datacenter Serverを2セット導入する計画」(武石氏)とのことだ。(取材/文 板谷芳男)



▲株式会社トレードビジョン 代表取締役社長 武石博氏



▲株式会社トレードビジョン 取締役管理部長 鈴木克男氏